

大阪における「子育て支援ガイドブック」の提案

(代表者) 鈴木 真由子 (家政教育講座 教授)

(分担者・協力者) 杉村 千聖 (大学院教育学研究科家政教育専攻 1回生)

【目的】

本事業では、大阪府下の自治体が発行する「子育て支援ガイドブック」に注目し、どのような内容項目で構成されているのか、その特徴と課題を把握する。また、それらが高等学校家庭科における学習内容と、どのような対応関係にあるのか検討する。同時に、子育て中の親がどのような情報を必要としているのか、親になる前にどのような学習が必要であると考えているのかについてニーズを把握し、以上の結果を反映させた「子育て支援ガイドブック」を試作・評価する。

【方法】

- 1) 自治体発行の「子育て支援ガイドブック」の収集・分析、意見聴取
調査方法：・行政担当者への電話による問い合わせ・資料提供の依頼
・ウェブサイトより資料ファイルを収集 (平成26年9月～11月)
- 2) 高等学校家庭科の教科書分析
・高等学校『家庭基礎』教科書全6社の「保育」「子育て」に関連する学習内容の整理
・子育て支援ガイドブックとの収録内容の比較
- 3) 子育てに関連した情報に対するニーズ調査
調査対象：子育て中の親12人
調査方法：個人・グループに対するヒアリング調査
調査時期：平成26年9月
調査内容：子育て支援ガイドブック利用の有無、育児中に利用した情報源及びその利点と欠点、親になる前に知りたかったこと、高校生が学んでおくべきこと など
- 4) 「子育て支援ガイドブック」の試作・評価
・1)～3)の結果を反映させた、「子育て支援ガイドブック」の試作
・行政担当者(43か所)及びヒアリング協力者(10人)を対象に試作版ガイドブックの郵送・評価の依頼

【結果・考察】

- 1) 大阪府下における「子育て支援ガイドブック」の実態
大阪府下の全43市町村のうち、冊子形態での子育て支援ガイドブックを発行している自治体は33市町村であった。ガイドブックの作成にあたり、収録内容は主に市職員が決定しており、外部団体に依頼している自治体はなかった。
行政担当者は、冊子形態によるガイドブックの意義について「インターネット環境がなくても情報を得られ、手元に置いておくことができる」(12市町村)、「(全戸に配布することで)市からの働きかけができる」(4市町村)、「情報量が多い」(3市町村)、「今必要でなくても予備知識として知っておくことができる」「スクロールの手間がなく見やすい」(それぞれ1市町村)といった、市民にとってのメリットを挙げたほか、「冊子を用いることで訪問時に説明がしやすい」といった、行政にとっての利点に対する指摘もあった。

2) 高等学校『家庭基礎』における学習内容と子育て支援ガイドブックとの比較

高等学校家庭基礎の教科書全6社中5社以上に記載されていた学習内容のうち、「予防接種」、「集団保育」、「遊びについて」、「虐待・育児不安」、「障がいのある子ども」については、情報の多寡はあるものの、収集した子育て支援ガイドブックのうち7割を超える冊子において何らかの記載が確認できた。また、「からだ、ことば、情緒、社会性などの発達のためやす」、「愛着」、「母乳と人工栄養、離乳食」、「基本的・社会的な生活習慣や子どもの生活リズム」、「子どもの事故（予防・原因）」、「育児の男女共同」、「子どもの権利条約」、「親の役割」については、1～3割程度のガイドブックに収録されていた。

一方、「乳幼児の衣服」、「社会で子どもを育てるしくみづくり」、「出生率」、「世界の子ども現状」といった子育ての社会的側面に関する学習内容について、記載されているガイドブックが確認できなかった。

また、教科書には掲載されていないが7割以上のガイドブックにされていた内容は「健康診断」、「手当・助成」、「医療機関一覧」、「相談窓口一覧」などであった。これらの地域に密着した個別性が高い生活情報は、行政サービスとして不可欠であると考えられた。

3) 子育て支援および子育てガイドブックに関するニーズ

ヒアリング調査の結果、子育て支援ガイドブックを利用した対象者は4分の1と少なかった。他地域のガイドブックをサンプルとして提示したところ、利用経験の有無に関わらず過半数が肯定的な反応を示した。その理由は「遊び場や親子で出かけることができる場所についての情報が得られるのが良い」（経験あり3人、なし2人）「リーフレットは管理できずバラバラになってしまったので（冊子形態がよい）」（経験なし2人）などである。また、紙媒体の利点としては、「見やすい・手元にあるからすぐに見られる」（4人）、「詳しい情報が得られる」（1人）のほか、「困ってからではなく予備知識として見られる」（1人）といった回答もあった。

子育て情報の収集にインターネットを利用した経験のある者も多かったが、「知りたいことがはっきりしているときには便利」（3人）という利点がある一方、「情報があまりにも氾濫しているのでだんだんネットからは離れた」（1人）という欠点も指摘された。

妊娠・出産以前に知りたかったことは、「子どもの発達の個人差・生活習慣」（5人）、「産前産後の体の変化・ケアについて」（5人）などであった。高校生に学習してほしい内容については「ホルモンバランスや出産前後の体のこと、婦人科検診の大切さなど体のケアについて」（4人）、「妊婦や幼児との触れ合い体験」（4人）、「子どもにかかるお金のこと、働き方のこと」（3人）などであった。また、「人間の倫理観、道徳を学んでほしい」という声も聞かれた。

4) 「子育て支援ガイドブック」の試作・評価

1)～3)の内容を踏まえ、子育て支援ガイドブックを試作した。紙面構成は、①必要と思われる情報の一覧、②具体的なガイドブックの実例、③関連する高校家庭科学習内容の紹介、である。作成したガイドブックは、行政担当者及びヒアリング協力者に送付し、評価を受ける。

【今後の課題】

行政担当者及びヒアリング協力者からの評価結果を踏まえ、試作版「子育て支援ガイドブック」の改訂を行う予定である。